

千里ニュータウン新千里東町における暮らしの記憶と住環境の経年変化に関する研究

正会員 ○栗本絢子*1 同 鈴木毅*2 同 松原茂樹*3 同 奥俊信*4

5. 建築計画—1. 住宅計画

千里ニュータウン, 住環境, 階段室, 囲み型配置, 経年変化

1. 研究の背景と目的

2012年、千里ニュータウンはまちびらき50周年という節目を迎えている。日本初の大規模ニュータウンとして開発され、実験都市として当時の行政や研究者による構想の下に計画された千里ニュータウンは、50年の歴史の中で、居住者の手により住みこなされた街へと変化を遂げた。ところが、現在の建替えや再整備計画の多くは、高さや容積率についての議論はなされても、居住者自身が醸成してきた居住環境とそれを許容してきたその空間的価値を鑑みることなく進められている。建替えを進めていくに当たり、居住者が醸成してきた居住環境に価値を見出し、街の歴史を蓄積していく必要がある。本研究では、現存する階段室・囲み型住居での居住者自身が醸成してきた居住環境に関して記録し、その中からその空間的価値の一端を明らかにする。さらに居住者の働きかけを含む社会的・物理的住環境の変容過程を捉え時代区分を行い、経年変化を追うことで、今後の住環境形成における有効な知見を得ることを目的とする。

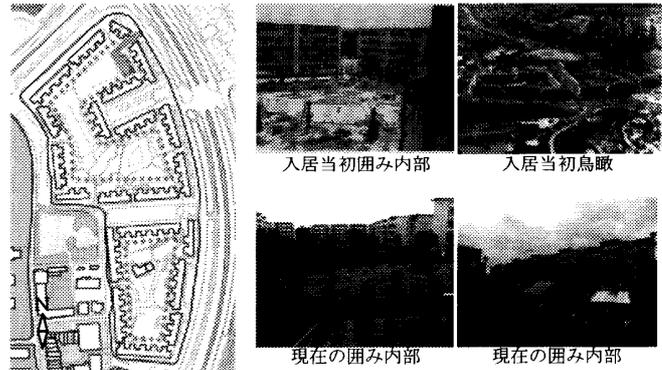


図1 府営新千里東町住宅 (781戸/1965年入居開始)
※建替え前

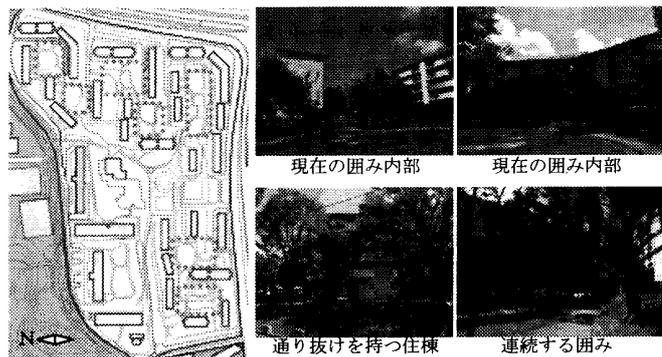


図2 公団新千里東町団地 (1522戸/1970年入居開始)

2. 調査対象地

本研究では、調査対象地を豊中市新千里東町にある大阪府営新千里東町住宅(以下、府営住宅)、公団新千里東町団地(以下、公団団地)とした。新千里東町では、1966年のまちびらき当初に建設された10団地のうち8団地が建替え完了あるいは建替え中であり、住環境が大きく変化している。府営住宅でも、2010年より建替え工事が始まり、2012年12月には第1回の居住者引っ越しが行われている。公団団地は、建て替えは行われていない。府営住宅、公団団地ともに、階段室によるアクセスと囲み型配置に計画されていることが特徴的である(図1、図2)。

3. 調査概要

階段・囲み配置住宅での暮らしの歴史を蓄積し、経年変化を追うために、表1の調査を行った。

表1 調査概要

調査項目	調査内容
ヒアリング	府営住宅初期居住者 10名(2011.5.27) 5名(2011.7.13) 公団団地初期居住者 3名(2011.10.11) 2名(2012.1.10)
文献	千里NT全体 公団団地 空間変容把握
現地	空間変容把握の補足

The memory of lives and aging of living environment in Shinsenrihigashimachi

KURIMOTO Ayako, SUZUKI Takeshi, MATSUBARA Shigeki, and OKU Toshinobu

4. 記憶からみる階段・囲み配置の空間的価値

ここでは府営住宅、公団団地に初期から住む居住者へのヒアリング調査を逐語起こしし、その発言の繰り返し、独特の言い回し、一貫性、矛盾等から居住者の生活空間の空間的価値の分析を行う。

4-1 「階段」という単位

階段という単位の特徴

階段は縦につながる10戸のまとまりであり、部屋番号もこのまとまりで100台、200台…という様につけられる。各フロアは2戸の住戸が扉を向かい合わせて成り立っている。このまとまりが横に連なって住棟が形成される。このことから階段は単位として必然的に接地することとなり、府営住宅の場合には、階段室から広がる前後の足元空間の範囲が掃除の範囲と直結している。また、居室からの視線もこの足元空間に届く。居住者たちはこの範囲で、花を植える、野菜を育てるといった維持管理を含む活動も行っている(図3)。

「うちの階段」

階段室は、回覧板を回す、掃除をするといった自治活動の最小単位であり、また井戸端会議や物の貸し借りを、部屋にいる気配が分かる、子どもの預かり合い等日常での接触を生み、最低限の顔合わせの機会を保障するものであり、結果として鍵を掛けない、同じ階段室の10軒はみな顔見知りである、といった安心感の持てる場であった。居住者は発言の中で「うちの階段は」「階段で遊びに行きました」といった「階段」という言葉の使い方を。これは居住者が無意識に階段という単位をひとつの社会集団として認識していることの表れである(図4)。

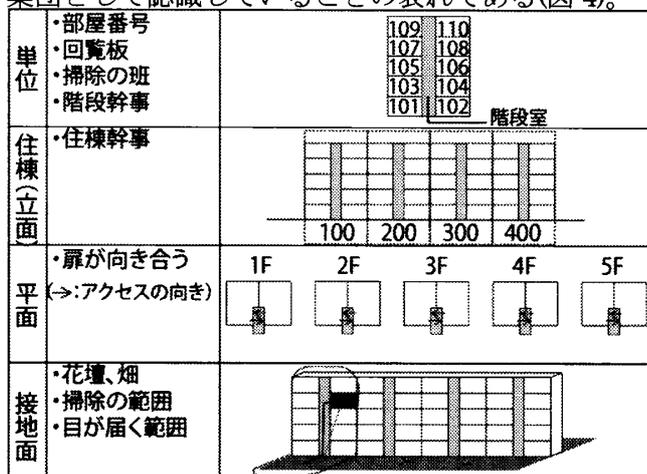


図3 「階段」という単位の特徴

F:うちの階段は—あ、仲がいいですよ。…(略)… みんなで。
 I:そうですね、昔は集会所でお葬式もあったからあ、ここ使ってたから、あの一、階段ごとで一、葬式があったときは、台所を借りて—あの一そこでチラシ(寿司)を作っていました。私の階段2回チラシを作って、ここでお葬式をして。
 H:うちも2回。
 >:じゃあ階段の中は、階段室の人が=
 A:階段の中はあの一お掃除好きな人は個人でしてた人もおるし。(略)
 C:今でも階段の中ぐらいはみんなそれぞれに、ねえ。
 F:いやあの来た当時はね、その階段でね、…(略)… あそこのむこうっかわに一、南千里の手前にボーリング場があつてえ、子ども連れて、階段で遊びには行っていました。

図4 「階段」に関する発言

4-2 外部空間のオモテ・ウラ

府営住宅、公団団地ともに囲み型配置の集合住宅であるが、その配置計画の違いにより、居住者の外部空間の認識にも違いがみられる。(図6)

府営住宅の囲み配置は階段室へのアクセスが全戸外からであり、ベランダが中庭に向いていることから、居住者は囲み内部が明確に「ウラ」となっている。一方の公団団地は、150戸を単位としてクラスター状に連続した配置計画であり、囲みの内外が明確化されていない。会話の中で無意識に「オモテ」「ウラ」という呼び方をするものの、府営住宅との比較の質問を投げかけると「聞いたことがない」と答える。自分の住戸だけを考えたときにアクセス方向が「オモテ」、ベランダ側が「ウラ」という意識があるが、計画団地全体としてその方向が統一されていないため、居住者の共通認識は生じず、曖昧さを残し

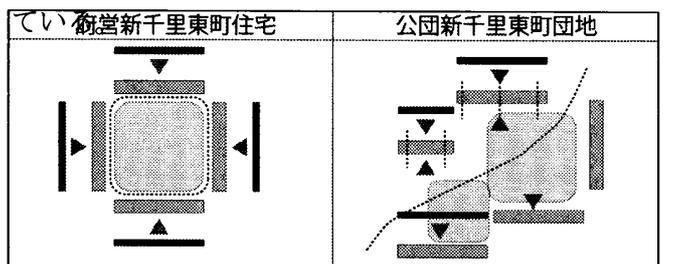


図5 府営・公団比較模式図

4-3 居室と外部空間が段階を持ってつながる

オモテ・ウラ意識に違いがあるものの、どちらの場合にも居住者は自分の生活のなかで慣れ親しむ空間として外部を活用している。これは階段という単位を認識し、その単位が接地していることから、居室から段階を持って外部へと領域が広がるためであると考えられる。

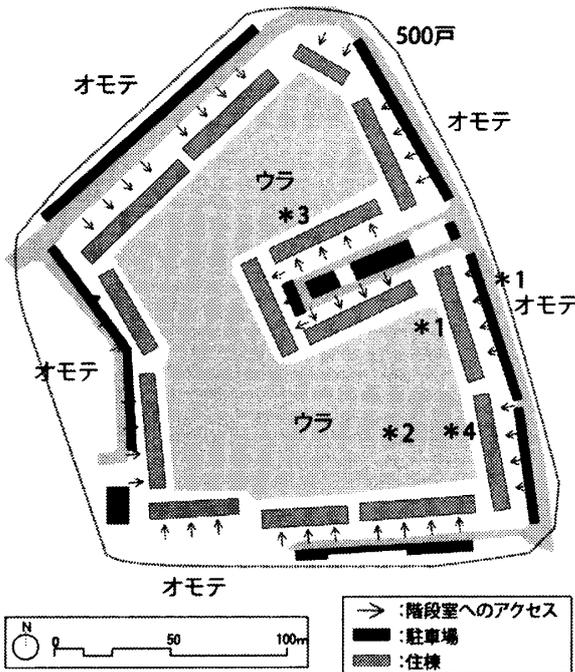
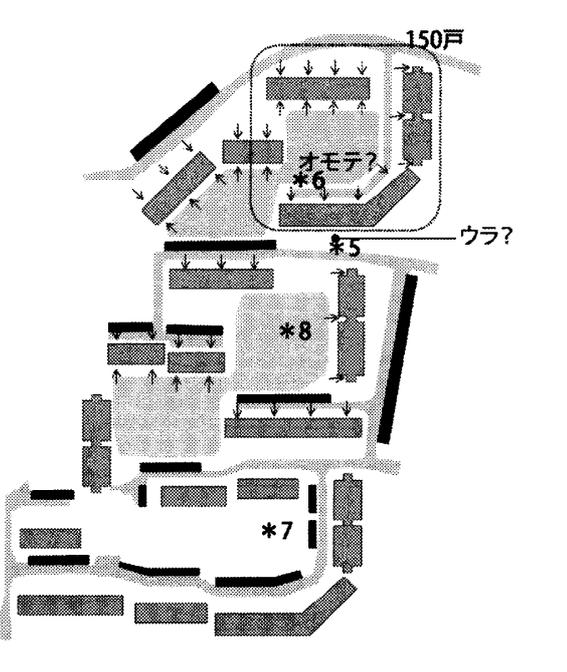
配置計画(同縮尺・入居当初)	<p>府営新千里東町住宅</p> 	<p>公団新千里東町団地</p> 
	<p>空間特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> 階段室へのアクセスは全て囲み外部から 駐車場は囲み外部にしかない 住棟軸に関係なく2DK 	<p>居住者の発言</p> <p>O: その当時ウラで花壇をしてた人が多かったですよ。 M: ああー、野菜やらなんやらやってたね。 (略) >: 何を作られましたか。 M: みなキュウリも作ってたしトマトも作ってたし。 K: ウラに、そういうの作ってマエは花をしてたね。(※1)</p> <p>>: みなさんこちらのグループ(囲み)ですね。 K: はい、はい。 >: こっちにバレーコートがあったんですね。 K: はいそうです。えーとこれのウラに、あったんです。今駐車場が出来ているところ。すべり台やらね。テニスとバレーが兼用でできるところがあった。寒い空間があるところやなーと思った。(※2)</p> <p>>: 子供たちはこの山に登って遊んでました? A: そうやー遊ばんかったね、もう種木、木いっぱい植えてるんよ。// >: ああ // ここでバレーボールやらちよつとしてた。そんな何年もせえへんかったわ。(※2) C: もうここで野球やらしよったところは、もうウラのガラスよう割られたわ。// >: ええ // ボールが飛んできて、1階やったんで。(※3)</p> <p>G: 私千里に来て一番よかったの、(・・・)車があんまり中に入ってこないのよ。子供の遊び、学校に行くのにも車の心配ない。ひじょーにいいとこだなあ思った。それがいちばん嬉しかった。 >: ここで子供遊ばせて上から見てたいのありますか? G: ありますよ。あの一昔はね、ここ(※4)ね、ほんとにグリーンがごうあって車が少なかった。ほいでうちの子は3歳と5歳でした、ここ来た時。したらね、こんな車の駐車場はなかったね、いまこそ全部車になってるけど、ここにおーきな、グリーンだね、木が植えたり、銀杏の木を植えたりして、そやからうち5階やから、ちよつと真下で遊ぶからね、私ここからねえ、もうほんとに楽でしたよ。うん、車はこない、あーの入ってこないし、すーつと通り抜けもする車なんかいないからねえ、子供の遊び場とか、学校にいつてあそびがないからねえ、ほんーとに楽でしたわ。 >: じゃあご飯が出来たら「ご飯できたよー」と= G: ううん、このウラで私ここでしょ、砂場で遊ぶでしょ、ほんでそやからね、砂場でも遊んでるし、もういろいろな。ほんーとに楽ですわ。うん、ありがたいと思った。</p> <p>>: 子どもは自由にさせて大丈夫だったんですねか。 M: そりゃもうもちろん。(笑) 危険はなかったね。 O: 5階までなんですけど、その子どもが遊んでいるのを親が見ながら仕事が出来たんですよ。 M: うん。 >: あ、内職しながら。 O: 部屋の中から覗けばです。 M: はい。 K: ウラで遊んでおいでーゆうたらね。</p>

図6 府営・公団のオモテ・ウラ (>、>, #はインタビューアの発言、英字は居住者の発言を表す。(※数字)は発言内容と場所との対応を表す)

5. 自治会ニュースにみる住環境変容と時代区分

公団団地では、1978年7月16日に自治会が結成され、第一回自治会ニュースが1978年8月8日に発行される。1990年から「やまびこのように住民から反応が返ってくるように」との思いを込めて「エコー」と命名された。累計発行部数は172部(2011年6月)に上る。自治会ニュースの記事変遷による時代区分を図7に示す。記事の話題は、第I期(1978-1995)には住環境の問題に関する記事が多く、熱く活動報告がなされるが、第II期(1995-)には高齢化し、活気がなくなったことの自覚、それにより奮起を促す啓蒙記事が多くなる。

6. まとめ

階段室・囲み型配置の空間的特質

階段は単位としての認識を居住者に与える装置となっており、視線が届く・掃除する・植木草花を育てるといった活動による居住者の所有・管理意識が階段室の前後空間で確認され、さらに囲みによるまとまりのある空間へと連続している。居室から階段、

階段から前後空間前後空間から囲み全体へとといった生活の広がりが自然に形成されており、結果として住民の共有意識の高い空間が団地全体として形成されていた。

具体的解決に向けた活動から呼びかけ・啓蒙活動へ第I期には住環境に関する問題が発生し、積極的に住民活動が行われる。第I期を経て、住環境がある程度充足すると、第II期には高齢化問題が生じるが、団地内で固有に具体的解決活動をとることが出来ずスローガン等によって住民に情報発信される。第II期は、住環境を維持し、よりよくしていきたいという思いを持ちつつも、必要に迫れ、次々と活動していたI期に対し、行き詰まり・とまどい感をもちながらの活動となっている。

調査にご協力いただきましたみなさまに心よりお礼申し上げます。

参考文献

下渡純司 鈴木毅 奥俊信 木多道宏 松原茂樹:「千里ニュータウン新千里東町における住環境変容と居住者の住まい方の経年変化に関する研究」(日本建築学会近畿支部研究報告集, P33-36, 2006)

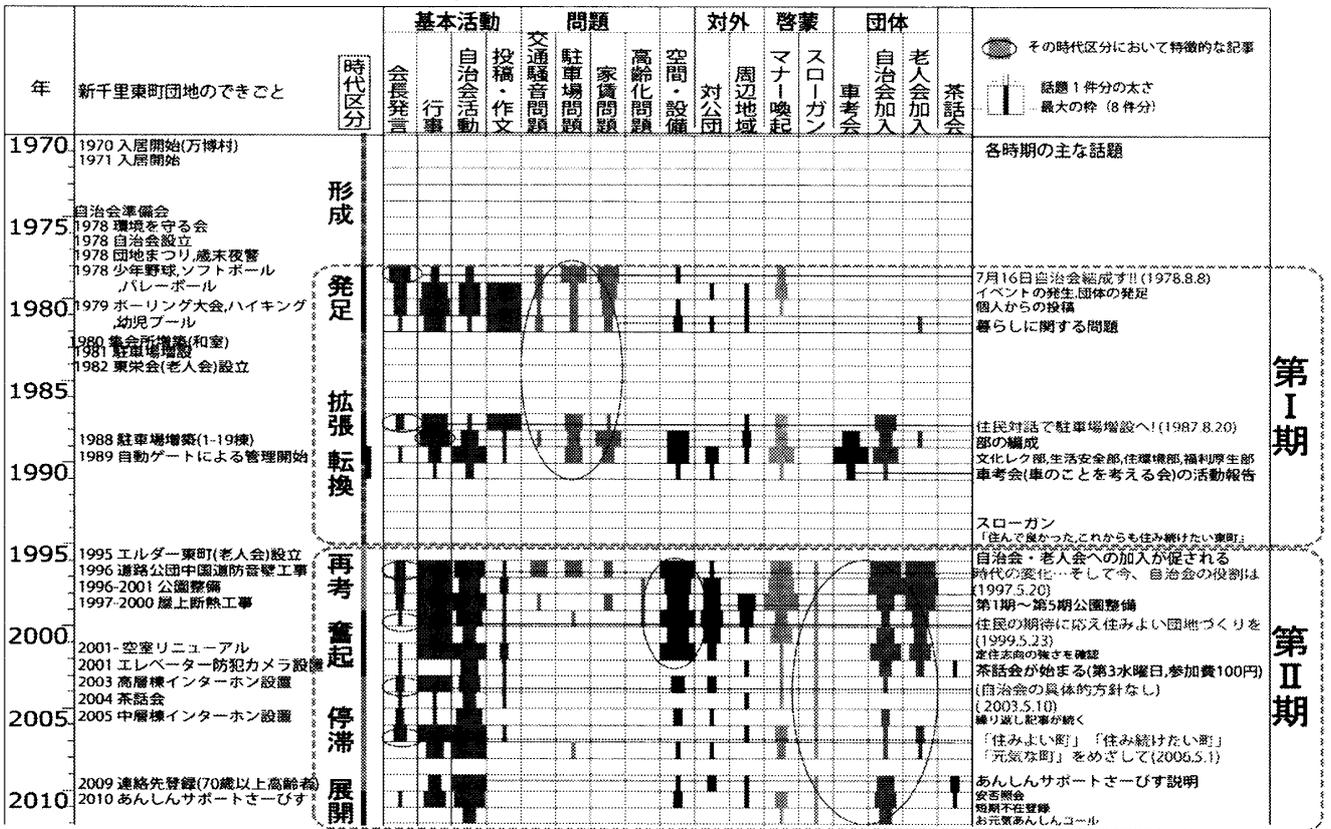


図7 公団団地自治会ニュースの記事変遷と時代区分

*1 住友林業株式会社 Sumitomo Forestry Co. Ltd.
 *2 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授・工博 Assoc. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
 *3 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 助教・博士(工学) Assis. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
 *4 大阪大学 名誉教授・工博 Emeritus Prof. Osaka University, Dr. Eng.